
踊る手

蒼目ハク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
踊る手

【Nコード】
N6239V

【作者名】
蒼目ハク

【あらすじ】
交通事故で右腕を失った工藤紗夜くどうさや。移植手術で死者の右腕の提供を受け、リハビリで回復に至るのだが、やがてその右腕は紗夜の意に反して動き始める……。

気が付くと、私は道路に突っ伏していた。急発進させた車のタイヤが、甲高い摩擦音を立てて遠ざかっていく。誰かの悲鳴が上がった。夏の太陽光を吸収したアスファルトの熱が、露出した肌を焼く。全身が燃えるように熱く、痛い。でも、ある部位だけは感覚が無かった。

右腕の肘から先が、あらぬ方向に折れ曲がり、血塗れになって潰れている。それは最早、肉塊と呼ぶに相応しい代物に変わり果てていた。

その光景を目にした瞬間、私の意識は暗闇に落ちて行った――。

＊ ＊ ＊

緩やかに意識が浮上し、私は目を開けた。視界が白一色に染まる。一瞬天国かと勘違いしたが、身体中に走る痛みがそれを否定した。

――病室。私はベッドに横たわっていた。

そうだ……私は轢き逃げされたんだ。

気を失う前の情景がフラッシュバックする。大学の帰り道。背後に迫るトラックの走行音。撥ね飛ばされ、宙を舞う身体。踏み潰された右腕――。

はっとして右腕に視点を合わせる。布団の上で、ギプスで固定され、包帯が巻かれた右腕が、そこには存在していた。

「紗夜^{さよ}！ 気がついたのね」

病室の扉を開けるなり、母が涙声を上げて駆け寄る。

「良かった……すぐに先生を呼んで来るわ。もう大丈夫よ」

私の頬を軽く撫でると、母は病室を後にした。

大丈夫——私はその言葉に一抹の不安を覚えた。
右腕は存在していたが、未だに感覚はない。

しばらくして医者がやって来た。恰幅の良い、人の善さそうな顔立ちをした中年男性だった。

私は説明を受けた。柔和な目で私を見て、和やかな口調で話す医者だったが、その内容は衝撃的なものだった。

身体に受けた損傷は大した事はなく済んだが、右腕は壊死が酷く、やむなく切断したらしい。しかし、死んだ直後の右腕が手に入り、即座に移植手術を行ったというのだ。

俄には信じ難い現実^{にわか}に、私の頭は混乱した。

「安心して、紗夜。リハビリ訓練を受ければ、その手はすぐにあなたの物になるわ。そうすれば元通りよ」

母は、私の左手をそつと握り、何でもない事のように言う。その瞳は輝いていた。壊れた人形を修理してもらい、直ったのを喜ぶ子供のように。

手の蘇生処置は一週間続いたが、何のトラブルもなく終わり、次にリハビリが始まった。運動療法士の指導で一日二回のペースだったが、一月後には機能回復センターで本格的な訓練を受けた。

私は、これまで“手”に感謝した事なんてない。掴んだり、触れたり、言葉に表情を与える仕種だったりも、意識せず、気にも留めず、動くのが当たり前な日常を過ごして来た。だから今、もどかしい右手の代わりに普段の二倍働いてくれる左手が妙に愛おしく感じる。それと同時に、死なせてしまった右手に対して申し訳ないという罪悪感が溢れた。

「紗夜ちゃん？」

ある日、病院内を歩いていると、後ろから声を掛けられた。振り

返ると、そこには懐かしい顔があった。

「ハルくん？」

私が驚きに声を上げると、夏らしい小麦色の肌をした高村陽樹はるきは、人懐っこい笑顔で近づいて来た。少し右足を引きずっている。上下極彩色の幾何学模様がプリントされたサイケデリックな服装。人目を引く格好も昔のままだ。

「やっぱり紗夜ちゃんだ。中学以来だよ。高校別々になってから会う機会なかったけど、まさかこんな所で再会するなんて。腕、どうしたの？」

陽樹は、当時と変わらぬ朗らかな口調で聞く。

「うん、ちょっと事故に遭っちゃって。今はリハビリを受けて何とか回復中。そういうハルくんこそ、足と手、どうかしたの？」

私は、陽樹の引きずる右足と、包帯が巻かれた左手が気になった。「ああコレ？ 軽トラに撥ねられてさ。まあ元が頑丈な身体だから全然問題ないんだけど。ほらこの通り、元気！ 元気！」

そう言って陽樹は左手を掲げ、右足を持ち上げてみせるものの、すぐに「イテテ」と顔を歪ませる。

「相変わらず嘘が下手だね、ハルくん」

私は、当時の面影を残す陽樹にどこか安堵し、笑った。つられて苦笑する陽樹。

「後遺症が残るからって医者がうるさくてさ。嫌々リハビリ通ってた。でも紗夜ちゃんが入院してるなら、オレ頑張れる。うん、俄然やる気出た。次来る時は、もっといっぱい積もる話をしようね」
じゃあまた、とお互い手を振って別れた。

私は言えなかった。手を移植した事を。他人の、死者の手と共存しようとしている事実を知られたら、陽樹は一体どんな反応をするだろう。考えただけで心が震えた。

手は、順調に私の一部になりつつあった。心配されていた合併症

や拒絶反応も一切無く、術後数ヶ月で汗をかくようになり、爪が伸び始めた。これまで包帯を巻き直す度に右手から目を逸らしていたが、今は慣れてようやく直視できるようになった。よく見ると、ドナーの肌は私よりも健康的な色をしている。グラデーシヨンのように馴染んだ変化で違和感はない。極端に境目がくっきりしてたら、それこそ意識してしまうところだった。この手は、私のものではないのだと。

陽樹は言葉通り、私に会いに病室を訪ねて来てくれた。私達はお互いが知らない空白の時間を埋めるように話をした。それぞれが過ごした高校生活、大学生活の出来事など、会話が途切れる事はなかった。

小学生の頃から、陽樹は私にとって元気の源だった。私が落ち込んでいると、決まって面白い話をして笑わせてくれる。彼なりの励ましに、私はどれだけ救われただろう。今の辛くて出口の見えない治療やリハビリにも、陽樹の笑顔で耐えられる気がした。

「へえ、一人暮らししてるんだ」

私は、陽樹が剥いてくれたリングを左手でつまみながら言う。

「まあね。自分だけの城が欲しくて……何てカッコつけたけど、太助も一緒に住んでるんだ。淋しがり屋だからさ、オレ」

太助というのは、陽樹の愛犬であるパグの事だ。子供の頃、陽樹の家に遊びに行った時に、よく一緒に散歩をしたのを思い出す。

「太助ちゃん元気？ 久しぶりに会いたいな」

「じゃあ今度ウチに遊びに来なよ。太助もきっと喜ぶぜ。……部屋は、めちゃくちゃ散らかってるけど」

陽樹はむず痒い顔をして、栗色の頭を掻く。相当散らかっているらしい。

「退院したら、是非お邪魔させてもらうね。私、家事得意だし。任せて」

私が微笑混じりに答えると、陽樹の顔はたちまち晴れやかになっ

た。じつとできなくて目まぐるしく変わる表情が、仔犬のように愛くるしかった。

右手は驚異的なスピードで感覚回復した。本来なら、手先の感覚が回復するのに二年はかかるそうだが、この手はわずか半年で違和感なく動くようになった。痛みや熱、冷たさや手触りも、有りのまま感じ取る事ができる。医者も奇跡だと目を丸くする程だった。

私は退院した。リハビリ訓練には通わなければならなかったが、何よりも家に帰れる事が嬉しかった。

「お帰り。大変だったね」

父が運転する車で家に着くと、玄関で祖母が出迎えてくれた。さりげなく私の右手に視線を這わせる。

母は、その視線を遮るようにして祖母から私を隠し、

「さあ紗夜、疲れたでしょう？ 部屋に行って休みなさい」

と言って、私の両肩を優しく抱き、硝子細工の人形を扱うようにして二階の部屋まで付き添った。私は、自分が壊れ物になったみたいな気分にさせられた。

その日の夜。快気祝いの食事を終えた私は、早々に自室へ戻り、ベッドに身体を沈ませた。途端にケータイが鳴る。表示を見ると陽樹からだった。私は身体を起こして電話を取る。

「紗夜ちゃん？ 今日退院したんだって？ ごめん、行けなくて退院おめでとう」

早口で切羽詰まった声が聞こえて来る。

「わざわざいいのに。でも、ありがとう。ハルくんの声聞いたらちよっと勇氣出了。明日から久々の大学で、不安だったんだ」

私は右手を見た。腕のギプスは外れたが、まだ手を保護する為にプラスチック製の添え木を使っている。

明日大学に行って、久し振りに会う友人達がこの手を見たらどん

なりアクションをするのか、私の心は不安と恐怖で渦巻いていた。
「平気だよ。紗夜ちゃんは辛くて長い入院生活を乗り越えたんだから、もう怖いものなしだよ。何かあったら、オレがまた爆笑話を聞かせて、忘れるぐらい笑わせてあげるから」
陽樹の優しい気遣いが、私の硬くなっていた心を解きほぐしていく。

「ありがとう。おやすみなさい」

安心した私は、静かに瞼を閉じ、眠りに就いた――。

……苦しい。息が、できない。

地上に上げられた魚のように、口を開閉させても空気を嚙むだけで、酸素が上手く入って来ない。

首が何かに圧迫されている。絞め付けて、呼吸を止められている。深い底に沈み込んでいた意識が急浮上する。

私は覚醒した。カッと目を見開く。暗闇の中で首に絡み付くものがあった。それが喉を潰そうとする勢いで絞めている。

私は、左手で首に巻き付く“それ”を掴み、無理矢理引き剥がした。解放された瞬間、肺が酸素を欲して激しく咳込む。

左手の中には、痙攣する手の感触があった。引き剥がす際に爪を立てたが、何故か自分が痛みを感じている。

それは他人ではなく、自分のものだと思えた。脳が認識した、私の右手だった。

「どうしたの？ ぼうっとして」

いつまでも朝食に手をつけない私に、母が声を掛ける。

「ううん、何でもない」

慌てて笑顔を作り、味噌汁に口をつける。

昨夜の事、言ってもきくと信じてもらえないだろう。自分でも信じられない。夢だと思われるに違いない。いや、夢だったのかもし

れない。最悪な夢を、私は見たのだ。大学への不安が、悪夢となって現れた。そう思い込もうとした。だけど……。

そっと右手を見遣る。あの出来事が嘘のように、今はおとなしい。首に手をやる。絞められた感触が、まだ生々しく残っていた。

「何だか心配だわ。さっきもニュースで通り魔が出たってやっていたし。紗夜、大学が終わったらお母さん直ぐに迎えに行くから、ちゃんと連絡しなさいよ」

「わかった」

私は素直に頷いた。心配性の母に大丈夫という答えは通用しない。

「紗夜、大学はどうだった？」

その日の夕飯時。いつもより早く帰宅した父が何気ない口振りで尋ねる。

「最初は皆驚いてたけど、前と変わらず接してくれたよ」

「そうか、良かったな」

父は目に見えてほっとした表情を浮かべる。

友人達は、しなやかに動くようになった右手を見ても、他人の手を移植したなんて信じられないといった顔をした。奇異に満ちた目を向けられる事はなかった。それだけ右手が機能回復し、自分の身体と一体化したという事なのだが、私の心中は複雑だった。

「さあ、いただきますよう」

母が、テーブルの上にステーキが乗った皿を並べる。

「最近やけに豪華だな」

父が感嘆の声を上げる。

「だって紗夜、病院食が長かったじゃない。こういう食事が恋しいんじゃないかと思って、奮発しちゃいました」

「ありがとうございます。いただきます」

そう言って、私はナイフを左手に、フォークを右手に取った。しかし次の瞬間、フォークはステーキではなく、私の右目を突き刺していた。

「紗夜！」

母の悲痛な叫び声。父が私の右手を掴み取る。

私は、何が起きたのか咄嗟には理解できず、フォークが刺さったままの右目から、赤い涙をただ垂れ流し続けた。

私はすぐさま救急車で運ばれ、緊急手術を受けた。幸い失明には至らなかったが、角膜が傷つき、視力低下は免れないとの話だった。「どうしてこんな事を？」

術後、病室で医者が疑問を投げ掛ける。

「動いたんです。手が、勝手に……」

私はベッドに横たわった状態で、虚ろな口調で答える。医者は怪訝そうな顔をした。

あの時、私の意思を無視して暴拳に走った右手。コントロールが効かなかった。そこからは、はっきりとした殺意が窺えた。

私は確信した。この右手は、私を殺そうとしている……。

再び入院生活が始まった。

私は、移植手術を行った担当医師を訪ねる事にした。右手の前の持ち主、ドナーについて聞く為だ。

「ドナーに関する詳しい情報は教えられるんですよ」

診察室で向き合う医者は、申し訳ないといった顔をした。

「お願いします。どうして亡くなったかだけでも」

私は頭を下げて懇願した。しばらくそうしていると、根負けしたのか、医者は溜め息をついてから渋々口を開いた。

「……自殺です」

予想だにしない返答に、私は言葉を詰まらせた。医者は続ける。

「若い女性で、首を吊って……。あなたのお母さんの強い要望と、ご遺族の了解を得て、移植手術は行われました。だからその右手、

大切にしておいて下さい」

宥める言い方に苛立ちを覚え、反発する。

「でも先生、私怖いんです。この右手、まるで意思を持っているように……このままだと、いつか殺されてしまうんじゃないかって不安なんです」

話している内に視界が滲んできた。殺されかけた恐怖が蘇る。

「工藤さん、気をしっかり持って下さい。その手はもうあなたのものなんです。確かに患者さんの中には、他人の手である事を意識し過ぎるあまり、妄想を膨らませる方がいますが」

「妄想なんかじゃ……」

反論しようとする私に、医者は言葉を被せる。

「人は、耐え難い現実と直面すると防衛機制に頼り、夢や幻想に救いを求めるんです。しかし、手を完全にコントロールできるようにすれば、ドナーの存在に怯える事もなくなるはずですよ」

有無を言わせぬ説得に、私は押し黙るしかなかった。

病室に戻り、考えを巡らせる。

辛いリハビリにも耐え、やっと自分の身体の一部になった右手。簡単に手放すなんて出来ない、心の奥底で訴える自分がいる。それに、不完全を嫌う母は決して許さないだろう。右手を取り外すのを。そんな事しても、また新しい手を移植させるに違いない。治療もリハビリも一からやり直しになる。考えただけで気が遠くなった。

右手は私に敵意を向けて殺そうとしていたのではなく、死にたがっていたのだ。

自殺志願者だったドナーの女性。元々自己肯定感が低く、生きる事よりも死ぬ事に価値を置いていた。幼い頃からずっといじめを受け続け、自殺未遂を繰り返しては、死に切れない自分を責め続ける毎日。精神安定剤が手放せず、依存する生活。やっと出来た恋人に

も見捨てられ、唯一の支えだった友人も自殺で亡くした彼女は、絶望のあまり自宅のドアノブにマフラーをかけて、そして、自ら命を……。

そこまで考えて、私ははっとした。額に冷たい汗が滲み出る。

どうして私は、そんな事を知っているのだろう。医者からは、自殺した女性としか聞いていないのに……。

今、彼女の思考が手に取るように理解できた。右手を通して、彼女の寂漠とした孤独の苦しみが、押し寄せるように流れ込んできたようだった。

胃から酸っぱい物が込み上げ、口を押さえる。

右手は身体だけではなく、心も同化しようとしている。いや、同化じゃない。支配だ。自分と同じ苦しみを、私にも味わわせるつもりなのだ。

小刻みに震える左手で、爆弾に触れるように右手を握り締める。コントロールしなければならぬ。私のものにしなければならぬ。この手を懐柔するのだ。そうすれば、私は私を保つ事が出来る。私は、命令を下す脳に強く言い聞かせた。

気分を紛らわせる為、大学のレポートを書く事にした。ベッドの上に机を置き、パソコンを立ち上げ、両手で打ち始める。

スムーズに手が動く。その滑らかさに今は畏怖すら感じるが、私の意思通り正確に動いている。

しばらく打っていると、段々瞼が重くなってきた。閉じそうになるのを必死で堪える。ここ数日眠るのが怖くて、まともに睡眠を取っていないかった。

私は次第に睡魔に襲われていった。

キーボードを叩く音で目が覚めた。うっかり眠ってしまったらしい。

顔を上げた私は、目の前の光景に息を呑んだ。

右手が、私の意思を無視してキーボードを叩いている。猛スピードで文字が打たれていく。

「いやあっ！」

画面に目を向けた瞬間、私は声を張り上げ、反射的にパソコンを左手で弾き飛ばしていた。

まだ動き続ける右手の指を、痺れる程強く押さえつける。

右手はひたすら同じ文字を打っていた。画面いっぱい“死にたい”と――。

「死にたくない……。 “私” は死にたくないの！ お願いだから私の中に入って来ないで！」

私は震える声で叫んだ。繋ぎ合わせた骨、神経、血管から、彼女の念が毒のように染み込んでくる。それが静かに心を蝕んで、破壊しようとしている。私の中に沈澱する悲しみ、痛み、苦しみを強引に引っ張り上げて、集約させ、生きている今に絶望を叩きつける。

私は嗚咽を漏らしていた。自分で自分を抱き締める。温もりを感じた。まだ生きているという証。

私にとって死は、悲しみ悼むものであり、恐ろしい虚無だった。温かみのない、冷え切った暗闇の世界。

それなのに、いつの間にか私の中に生まれ、育つものがあった。

――死。その絶対的な無を愛する自分が。

彼女の思念が、私の中にあっただけの生きたいという熱情を冷やしていく。その代わりに、どうしようもなく疼いてしょうがない死への欲望が、のたうち回り始めていた。

「あら嫌だ。また通り魔ですって」

着替えを持って来た母は眉を顰め、不快そうにテレビを見つめる。
「怖いわね……まだ犯人捕まっていなみたいだし」

今までは、恐怖と嫌悪の拒絶した感情しか沸き上がらなかった殺人事件のニュースを、私は濁った心で静かに聞いていた。

心臓を鋭利な刃物で一突きされて殺された若い女性。傷の具合から見て犯人は左利きと判明したらしい。この間の通り魔と同一犯。以前死亡した連続通り魔犯と手口が類似している点から、模倣犯の可能性も視野に入れて警察は捜査を進めているようだった。

私もこの殺人犯のように、自分を制御できなくなったら……。脳裏に、死体となった自分の姿が浮かんた。

「紗夜ちゃん、どうしたの？　こんな夜に」

アパートのドアを開けた陽樹が、驚きと嬉しさを交えた顔を出す。一人で過ごす夜が怖くて病室を抜け出して来た、とは言えない。

「ごめんね、突然遊びに来ちゃって。ハルくんの顔が見たくなって……迷惑だった？」

陽樹は慌てて首を振る。

「全然。紗夜ちゃんならいつでも大歓迎だよ。どうぞ」

私は、お邪魔します、と言って靴を脱ぎ、部屋に上がる。

1LDKの、こじんまりとした部屋だった。それでも狭いと感じなかったのは、整然と片付いていた為だろう。

「綺麗にしてるんだね」

私は部屋を見回した。壁に掛けられたギター。ガラステーブルにきちんと並べられたリモコン。整頓されたCDラックに本棚。ビニール紐で括られた新聞紙に雑誌。黒い絨毯が敷かれた床にも、ゴミ屑一つ落ちていない。定期的に掃除機をかけないと保てない綺麗さ

だ。

物が散乱した部屋をイメージしてただけに、その光景は意外に映った。

「まあね。ごちゃごちゃしてるの嫌いだし。それより紗夜ちゃん、どうしたの、それ」

陽樹は左手の人差し指で私の眼を指す。

「あ、これは……ちょっと怪我しちゃって」

私は、眼帯に触れながらしどろもどろに答える。

「ふーん……何か変な言い方だけど、似合ってる。儂いっていうか、触れた瞬間脆く壊れそうなカンジが、紗夜ちゃんの雰囲気ピッタリ」

屈託なく笑う陽樹。私は反応に戸惑いながら、用意された座布団の上に座る。

「そういえばハルくん、太助ちゃんは何？」

さっきから陽樹の愛犬の姿が見当たらなかった。気配すらない。

陽樹は思い出したようにああ、と声を落とし、

「実は、今実家に預けてるんだ。最近鳴き声がうるさくてさ」

「そうなんだ……」

「がっかりさせてゴメン。まあ、ちょっと待ってて。お詫びにすっげえおいしい紅茶、淹れてくるからさ」

そそくさとキッチンに向かおうとする陽樹を、私は呼び止めて制する。

「いいよ、ハルくん。無理しないで。まだ手、完治してないんでしよう？」

私は、未だに指先まで包帯が巻かれたままの左手を見遣った。

「だーいじょうぶだって。利き手は右手だし。お客さんはゆっくりしてて」

陽樹は手を振ってキッチンに向かう。私は仕方なく待つ事にした。

陽樹だったら、私の気持ちを理解して、正しい答えをくれるかも

しれない。今の私は、灰色の霞がかかった状態だ。生と死の狭間で心が揺れ動いている。一人で考えれば、きっと天秤は死へと傾いてしまうに違いない。

臆病で弱虫な自分を、私は怖れた。どちらが正解なのか、陽樹なら教えてくれる。そう信じて、背中を押してほしくて、私はここに来たのかもしれない。

不意に静寂を壊す物音が聞こえ、私の思考は停止した。

どさりと何かが落ちる音。ベランダの方向からだ。

気になった私は立ち上がり、そっと窓に近づく。そして、カーテンを少しだけ開けて外を見た。

ベランダの隅に、ポリバケツが転がっている。側には黒いゴミ袋。風もない日なのに倒れたのだろうか。

訝しく思いながら目を凝らしてよく見ると、ゴミ袋の中で何かが蠢いているのが分かった。

思わず窓から後退さる。軋るような悲鳴が喉の奥から上がるのを、口を押さえて閉じ込めた。

何、今の……。

「紗夜ちゃん」

背後から陽樹に声を掛けられ、肩をびくつかせる。振り向いた瞬間、私は力強く抱き締められていた。胸に熱いものが広がる。

「ごめん……我慢できなくて」

陽樹の声は穏やかで、幸福に満ちていた。ゆっくりと腕の力を緩め、私を解放する。

離れた途端、私の胸から赤い鮮血が噴き出した。

恍惚とした陽樹の顔に赤い線が走る。

彼の手の中に、鋭く尖った物が見える。血に濡れたそれは、包丁だった。陽樹は包丁を握っていた。利き手とは逆の、左手に……。

その左手の包帯が取れかかり、肌が覗く。青白い、死人のように冷たい色。

ああ、そうか……。

私は薄れゆく意識の中で悟った。

陽樹は、不自然な継ぎ目を隠す為に包帯を巻いていたのだ。私に会わなかったのも、衝動を恐れて……。

彼も私と同じく感化され、戦い、負けてしまったようだ。侵食する、手の思念に――。

陽樹は唇を歪めて笑っていた。私の知らない、他人の顔で。

(後書き)

「神さまがくれた手」という本が非常に参考になりました。
まだ推敲するかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6239v/>

踊る手

2011年8月10日03時18分発行